

受験番号

[ ]

氏名

〔

〕

二〇二六年度

女子学院中学校入学試験問題 (国語)

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

\*サクマの缶入りドロップスは①別格のおやつだった。今も売っているのだろうか。

ただの甘い味ではない。何かに似ている。ずっと気に掛かってきたのだが、ようやく思い当たった。

おみくじ。

角のまるい楕円の缶を振ると、からりと乾いた音が響く。しばらく耳を傾けてから、思い定めて、えい！逆さにして勢いをつける。飛び出してくる（はずの）ドロップの速度を小さな掌では受け止め切れず、手近な紙片の上で缶を振った。

黒い穴からころんと転がり出るドロップの色。橙はオレンジ。赤はいちご。黄はレモン。濃茶はチョコレート。緑はメロン。白はハッカ。水色はソーダ味。

ほかの色もあつたかもしれないが、あるいは水色は入っていないかつたかもしれないが、私の記憶ではそういうことになっている。缶を振るとき、緑と白じやありませんようにと念じたのは、メロン味とハッカ味が苦手だったからだ。メロンの味は、いまだに敬遠しがちである。ドロップスは粒が大きくて、さざれ石みたいに固く、なかなか溶けない。でも、苦手な味だからといって口に入れない選択はなかったし、どういうわけか白や茶が現れる回数が少ないのも不思議で、ともかくサクマの缶入りドロップスには翻弄された。しかし、その理不尽な感じ、中身が見えない得体の知れなさに惹かれるから、②後生大事に缶を振って自分をつかのま預けたのかもしれない。やつぱり、おみくじに似ている。

つい最近になって③母から聞かされた話が、④蜘蛛の糸のようにドロップスにべたりと貼りつくようになった。

八十四歳の母は、\*昭和二十年秋、⑤十一歳のある日を忘れることができない。

母の父は出征して陸軍に入隊し、中国大陸に渡って山中で訓練を重ねたのち、

フリリピンの戦地へ向かった。いっぽう家に残されたのは家族五人。私にとつての祖母、私の母を筆頭に三歳違いの四人きょうだいである。昭和二十年六月二十九日午前二時四十三分、岡山山空襲に遭つた日も母子五人が身を寄せ合った。岡山市

内からふた駅離れた土地だったから、焼夷弾が投下されるたび、閃光がばあつと市内に広がる遠景を見た。

「岡山の街が怖ろしいほど真っ赤になって、防空壕に逃げこむのもこわくなった」。暗がりのなかで、四人の子どもたちを自分のまわりに集めて抱き寄せた祖母から言い渡された言葉も、母は忘れていない。

「お母さんからこう言われた。『ちかちゃん、いくちゃんと手をつないで逃げなさい。ぜつたいに手を離れたらいけんよ。もしお母さんとはぐれても、だれか親切なひとが必ずいるから。必ずどこかで会えるから』」

⑥その言葉を握りしめ、母はすぐ下の妹の手をぎゅっと握んだ。

空襲ののち、朝方から小雨になった。家族五人、はぐれずに家にたどり着く途中、市街地から着の身着のまま荷物ひとつ持たずに逃げてきた人々が列をなして歩いているのを見た。その翌日から、衣類や家財道具を「買ってもらえませんか」と知らないひとたちが訪ねてくるようになった。買ってあげたくても、交換できるだけのお金も物もないから、「ごめんなさい、ごめんなさい」とお母さんが謝って帰ってもらっていた、と母が言う。母の実家は寺である。

八月十五日正午、「天皇陛下から大事な話がある」というのでみなが座敷に集まり、正座してラジオに向かった。

以下は、母の話。

ああ戦争がやつとおわつた。ラジオを聴きおわつたとき、口には出さなかつたけど、家族みんなものすごくうれしかった。だって、お父さんが帰ってくるんだから。

でも、⑦それがいつなのか、口に出してお母さんに訊けなかつた。お父さんは必ず生きて戻るのか、そこからして誰にもわからないんだもの。

五人が横並びになつて寝ていたのは、居間の掘りごたつの脇だった。あれは、いつ何が起こるかかわからないからすぐ外に飛び出せるように、というお母さんの心づもりだったんよ。

戦争が終わって二年め、九月に入った頃の朝だった。布団のなかでうとうととしていたら、がちゃんがかちゃん、聞いたことのない金属の音がだんだん家のほうへ近づ

いてくる。何の音だろう、じつと耳を澄ませていると、隣で寝ていたお母さんとつぜん布団をがばつと撥ねのけ、飛び起きて大声で言った。

「ああっお父さんっ」

お母さんが転がるようにして裸足で外へ飛び出していったから、私もすぐあとを追いかけた。そうしたら兵隊姿のお父さんがそこに立っていた。がちやんがちやんと鳴っていたのは、兵隊靴についている金具が当たる音だった。

お父さんが帰ってきた。もううれしくてうれしくて、お父さんのまわりからだあれも離れなかったよ。

その日のお昼だったと思う、金平糖がでた。ツノの立った直径五ミリくらいの小さい、星のような白い金平糖。そのなかに赤い金平糖がひと粒だけ、混じっていた。きれいでねえ、天にも昇る気持ち。わーっと歓声を上げてきようだい四人が取り囲んで、赤い金平糖の取り合いっこを始めたわけ。そうしたら、⑧お母さんがものすごい剣幕で怒った。

「お父さんが水だけ飲んで、どんなに大変な思いをしてこれを持って帰ってきてくれたか。なのに、赤だの白だの。命と引き換えに金平糖をくださったのに喧嘩なんかするもんじゃありません！」

とたんにみんな、しゅんとなつてねえ。\*内地では甘いものが食べられないと風の便りに聞いたお父さんが、日本に帰ってくる船のなかで支給された金平糖に手をつけず、そのままポケットにしまったのを渡してくれた、そういう金平糖だった。味はぜんぜん覚えてないけど、お母さんのぴりつとした叱り声だけはよく覚えてます。

金平糖と風が、お父さんのおみやげだった。

母から聞いた、もう七十数年以上前の話だ。「へえ、そんなことがあったの」と応じながら、私は、小さな赤い金平糖と白い金平糖に向けていつせいに注がれる幼い四人のきようだいの視線に捕まってしまう。兵隊服のポケットにしまわれた金平糖が海を渡り、船を経由し、陸に上がり、鉄道を乗り継ぎ、がちやんがちやんと兵隊靴を鳴らしながら上下に揺れたのち、寺の\*庫裏の居間にころころと転がりてた場面の映像を何度も巻き戻してはリフレインさせる。

金平糖が海を渡り、四人きようだいが赤い金平糖の取り合いっこをする日が来なければ、いまの自分は存在していない。

もし、祖父が戦地から帰還できなかったら。

もし、岡山大空襲の朝、祖母ときようだいたちがはぐれたままだったら。

もし、父の目前に落ちた射撃弾の位置がずれていたら。

⑨「もし」の連打が、私という一個の人間の存在を激しく揺さぶってくる。

金平糖にはこんな破壊力があつたのか。吹けばからころと飛んでゆく、歯を当てただけであつてなく崩れる子どもじみたお菓子だと思っていたのに。甘いひと粒からつんと突き出た無数のツノには説明のつかない奇妙な風情が絡んでいると思えば、金平糖がただならぬ形相に見えてくる。

いつだったか、京都で金平糖をつくるのを見たことがある。

銅鑪と呼ぶ巨大な釜を使うのが、まず不思議だった。あの小さな砂糖菓子をしらせるために、ひとがすっぽり入るくらいの大釜が必要なのだ。ザラメを入れて熱にかけ、柄杓で糖蜜を掛け回しながら、ひたすらかき混ぜ続ける。回転しながら、少しずつ、少しずつ、見えないくらい速度で大きくなってゆくのだが、もちろん目を凝らしてみてもよくわからない。指の先ほどの金平糖に仕上げるためには二週間もかかるって聞いて、腰を抜かした。銅鑪の上でころころ回転しながら、釜肌に貼りつく瞬間の一点がだんだんツノに育ってゆくんですと説明されても、なかなか理解できず、⑩につままれた気がした。それほど時間と労力を費やしてつくられる金平糖なのだから、ほの甘いだけのお菓子と見くびるほうが間違っているのだろう。

金平糖を入れる容器を「振り出し」と呼ぶ。ときおり骨董屋で陶器やガラス、銀製の時代物を見かけるけれど、これがなんとも⑩思わせぶりな佇まいだ。掌におさまるちんまりとした大きさを、胸はまるくふくらんでおり、先端の口はしゅつとすぼまって細長い。口に嵌める小さな栓は、象牙だったり黒柿だったり、白木だったり。なかには金平糖が入っており、栓をはずして手に持ち、斜めに傾けると、これまた思わせぶりたつぷりに金平糖がぼろんと転がり出てくる。だから、「振り出し」。ただの手慰みだけれど、母の記憶に耳を傾けたあとでは、「振り出し」と

いう道具は金平糖にこそふさわしいものと思われるのだ。

⑫ドロップスも金平糖も、おみくじの化身なのかもしれない。甘いふりをして、ななが転がり出てくるのか。鉄火場のサイコロにも通じている気がする。

(平松洋子『父のビスコ』より「母の金平糖」)

\* サクマ：菓子製造会社の一つ。

\* 昭和二十年：原文の通りだが、この箇所のみ昭和二十一年のことだと考えられる。

\* 内地：ここでは日本国内のこと。

\* 庫裏：寺の中で、僧やその家族が生活している場所。

問一 — ①「別格」の言葉の意味として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 普通のものとして少しだけ異なるということ。

イ 特別なものとして扱われているということ。

ウ 他と区別して優先されるということ。

エ 気品に満ちて風格があるということ。

問二 — ②「後生大事に缶を振って自分をつかのみ預けた」とありますが、どう

いうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 大人になってもずっと大切に缶を振って、長い時間をかけて、自分の

願いがかなうように祈った。

イ もつたいぶつてゆつくり缶を振って、しばらくの間、自分が神様にな

ったかのような感覚を味わった。

ウ 力強く一生懸命に缶を振って、ほんの短い間、自分と缶だけの世界に

ひたった。

エ 心をこめて缶を振って、少しの時間、思い通りにはできない自分の未来を委ねた。

問三 — ③「母から聞かされた話」とありますが、この「母」の家族に関し

て、本文1ページ目の内容と合っているものを次から選びなさい。

ア 「母」は祖母・両親・子どもたちの三世代で暮らしていた。

イ 「母の父」以外の家族は疎開して岡山の寺に住んでいた。

ウ 「母」は長女で、下に三人のきょうだいがいる。

エ 「母」に一番近いきょうだいが妹か弟か本文からは読み取れない。

問四 — ④「蜘蛛の糸のようにドロップスにぺたりと貼りつくようになった」と

とはどういうことですか。最もふさわしいものを次から選びなさい。

ア 母の金平糖の思い出によって、ドロップスがより魅力的に思えるようになったということ。

イ 戦中・戦後にまつわる母の金平糖の思い出から、ドロップスを食べることが少し後ろめたくなったということ。

ウ 母の金平糖の思い出と自分のドロップスに対する思いが、いつのまにか区別できなくなったということ。

エ ドロップスを見るたびに、母の金平糖の思い出が呼び起こされるようになったということ。

問五 — ⑤「十一歳のある日」とはどういう日ですか。解答欄に合わせて答えなさい。

問六 — ⑥「その言葉を握りしめ」から読み取れる心情として、適切なものを

次から二つ選びなさい。

ア その言葉を何があっても守ろうと心に決めている。

イ その言葉を大人になっても忘れたくないと思っている。

ウ その言葉を手を通してきょうだいにも伝えようとしている。

エ その言葉を不安に思いながらも表に出さないようにしている。

オ その言葉を自分を支えてくれるおまもりのように感じている。

問七 ⑦「それがいつなのか、口に出してお母さんに訊けなかった」とありますが、このときの心情の説明として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 父が帰ってくるのはうれしいが、そればかり口にする、今子ども四人と一緒にいてくれる母を大事にしないように言い出せない。

イ 母にたずねても、母もわかるはずがなく、子ども四人を抱えて不安な中父の帰りを信じて待つ母を思うととても言い出すことはできない。

ウ 父が生きて帰ってくると信じているが、そうした願いは口にするほどかえって実現しないのではないかと怖くて口に出せない。

エ 戦争が終わっても父が無事に帰ってくる保証は何一つなく、毎日不安で落ち着かず、自分の思いを口にすることができない。

問八 ⑧「お母さんがものすごい剣幕で怒った」とありますが、その理由を自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。

問九 ⑨「もし」の連打が、私という一人の人間の存在を激しく揺さぶってくる」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 「もしもこうだったら」という現実にはならなかった出来事をあれこれ考えて、ほんのわずかな偶然によっていまの自分が存在していることに気づき、そのことへの感動で心が高ぶっているということ。

イ 「もしもこうだったら」という可能性が次々と頭に浮かび、戦争中に失われた命が数多くあることに思いをはせ、人間の存在が限りなくはかなく、いまの自分の存在も同じようにはかかないとわかったということ。

ウ 「もしもこうだったら」という身近な家族の異なる人生に想像をめぐらせてしまい、その通りになっていたらいまの自分の存在とはちがう、別の自分が存在していたかもしれないと恐ろしくなったということ。

エ 「もしもこうだったら」というたくさんの起こりえた仮定を考えずにはいられなくなり、一つでも現実になっていたらいまの自分は生まれないうことになり、自分の存在が危ういものに感じられるということ。

問十 ⑩にあてはまる動物をカタカナで答えなさい。⑩につままれ「とは、「思いがけないことにわけがわからずぼんやりする」という意味です。

問十一 ⑪「思わせぶりな佇まいだ」を説明した次の文の空欄にあてはまるふさわしい語を、漢字二字で答えなさい。

中に素敵なものが入っているのだろうと [ ] を持たせるような美しい容器であるということ。

問十二 ⑫「ドロップスも金平糖も、おみくじの化身なのかもしれない」とありますが、「ドロップス」「金平糖」「おみくじ」には共通するものがあると考えられます。本文をふまえて、その共通していることのうち重要だと考えられる二点を簡潔に答えなさい。

一 一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

科学は、病気を治す薬を發明したり絶滅危惧種を守ったり、世界そのものを変える力を持ちます。一方、文学は、世界のとらえ方を変えるものです。

A 静寂は爆音である①花吹雪 又吉直樹 『芸人と俳人』

芥川賞作家の芸人・又吉直樹さんの俳句です(集英社文庫所収)。音もなく桜が散る、美しい光景です。しかし又吉さんは、その静寂を「爆音」だととらえました。静寂が正反対の爆音のように感じられるほど、圧倒的な孤独の中にいるのでしょうか。散る桜も狂気を帯びているようで、なおさら目が離せません。私はこの句を知ってから、静かな桜を見るたび、聞こえない爆音を聞きます。

B もりあげてやまいうれしきいちこ哉 正岡子規 『子規全集』

明治二十八年、病で生死の境をさまよい一命をとりとめた子規は、神戸の病院に入院していました。後輩の高浜虚子と河東碧梧桐は、看病のために毎日、近くの農園から苺を採ってきます。くだものが大好きな子規は、山盛りの苺を留意してもらえるのも病気になるたおかげだ、病気は嬉しいものだなあ、と詠みました。ふつう、病気は嫌なものです。でも、②子規はあえて、発想を変えました。言葉の力で、逆境も肯定してみせたのです。

科学で解決できないことを前にしたとき、私の世界を言葉で変えるのが、俳句の力です。③その力は、俳句を受け取った人の世界をも変えうるのです。

「俳」という字のつくりである「非」には、「そむく。逆の方へ向く」(『新漢語林 第二版』)という意味があります。あえて常識にそむき、違う考え方を採用してみることで、逆境をのりこえる力が生まれ、自分とは異なる他者への理解も深まります。

「こう考えてみたらどうだろう」と思考に角度をつけ、マイナスをプラスに

変えてみましょう。俳句には、現代を生き抜くヒントがあります。④過去の俳人たちは、言葉の想像力で、答えの出ない困難を乗り越えてきました。みなさんもまた、解決できない問題の山積する、分断と混乱の時代へ漕ぎ出してゆくことになりませう。そのとき、⑤俳句という詩の考え方を装備に加えておくことで、自分らしさを見失わず生きてゆけるかもしれませう。

C 俳諧や木の実くれさうな人を友 正岡子規 『子規全集』

木の実ほたいした役に立ちませんが、心を灯します。受け取ったとき、ふと笑みがこぼれます。「俳諧」は俳句とは、誰かと木の実を差し出し合い、友だちのように語り合える、あたたかい詩です。言葉を通して、他者と心を通わせる経験は、きつとみなさんの財産になります。

私たちはふつう、明日もあさっても、今日と同じ日常が続くと思っています。でも、そんな保証はありません。それに、⑥俳句をはじめると、今日と同じ日は二度と来ないことに気づきます。朝焼けに染まる雲のかたち、朝ごはんのウインナーの焦げ、「おはよう」とあくびする友だちの寝ぐせ、教室を吹き抜けてゆく春風のやわらかさ。それらはすべて、今、この瞬間にしか存在しないものです。

今日がもし、世界最後の日だったら、なんでもない日々の風景も、一度つきの今の今として、輝きだすでしょう。そのかけがえのない世界のかげらに心ときめくとき、あなたはもう、りっぱな俳人です。

(神野紗希『俳句部、はじめましたーさくら咲く一度っきりの今を詠む』)

問一 — ①「花吹雪」の様子を説明したものとして最も適切なものを次から選  
びなさい。

- ア 桜の花びらが一枚、また一枚と静かに地面に降り積もる様子。  
イ 雪と桜の花びらが、交じりあつて降ってくる様子。  
ウ 風にあおられて桜の花びらが一斉に乱れ散る様子。  
エ 地面を覆いつくした桜の花びらが強風で一気に舞い上がる様子。

問二 Bの俳句について

(1) どの季節を詠んでいるが、次から選びなさい。

- ア 初夏 イ 晩夏 ウ 初冬 エ 晩冬

(2) 「もりあげて」とは、どのような様子を表現したものと考えられますか。  
最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 子規が病気の寂しさを紛らわせようと、後輩たちの持ってきた苺を積  
んで遊んでいる様子。  
イ 子規の後輩たちが持ってきてくれた苺が、たくさん積みあげられてい  
る様子。  
ウ 後輩たちが毎日子規のもとを訪れて陽気に語り、気持ちを明るくしよ  
うとする様子。  
エ 病気のことを隠して、子規が後輩たちの前で少しでも気丈にふるまう  
様子。

問三 — ②「子規はあえて、発想を変えました」とありますが、子規の発想の  
転換を説明しなさい。

問四 — ③とありますが、「俳句を受け取った人の世界」が変わった、というこ  
との具体例は、本文ではどの俳句で示されていますか。A〜Cから一つ選  
び、記号で答えなさい。また、その具体例の内容を、「誰が」「何に対して」  
「どうなった」の要素に分けて簡潔に答えなさい。

問五 — ④「過去の俳人たち」にあてはまらない人物を次から選びなさい。

- ア 西行 イ 芭蕉 ウ 蕪村 エ 一茶

問六 — ⑤「俳句という詩の考え方を装備に加えておくことで、自分らしさを  
見失わず生きてゆける」とはどういうことですか。その説明として最も適  
切なものを次から選びなさい。

- ア 様々な立場の人の逆境を乗り越える方法を理解できる俳句の力によつ  
て、自分ひとりでも分断と混乱の現代社会にのみこまれることなく生き  
てゆけるということ。  
イ あえて他者とは異なる考え方を採用し、言葉にするという俳句の表現  
方法によって、現代という難しい時代でも自分の個性を磨いて生きてゆ  
けるということ。  
ウ 常識とは異なる価値観を受け入れるという俳句の想像力によって、他  
者への理解だけでなく自分への理解も深めながら生きてゆけるというこ  
と。  
エ 言葉で常識とは異なる世界のとらえ方をするという俳句の発想によつ  
て、困難のなかでも自分がおしつぶされることなくしなやかに生きてゆ  
けるということ。

問七

Cの俳句を挙げながら筆者は俳句をどのようなものだと述べていますか。次の文の空欄に語句を適切に補いなさい。ただし、(II)は本文の語句を抜き出すこと。

木の実はそのほど役には立たないけれど、心を( I )する、心ときめくものだ。俳句は、そのようなものごとを言葉にすること

( I ) ( II ) ことができる詩である。

問八

⑥「俳句をはじめると、今日と同じ日は二度と来ないことに気づきます」と述べている筆者の考えとして、最も適切なものを次から選びなさい。

ア 俳句をはじめると、なんでもない日常を言葉で表現するようになり、今までとは違う新鮮な毎日を誰かに伝えたいと思う。

イ 俳句をはじめると、普段気に留めない日常の小さなことから目に向けるようになり、その都度ささやかな発見に感動を覚える。

ウ 俳句をはじめると、生活の一瞬一瞬をかみしめるようになり、日々の生活は簡単に崩れ去るかけがえのないものであると気づく。

エ 俳句をはじめると、繰り返しに見える日常のささいな変化に気がつくようになり、その変化に富んだ日々への感謝が深まる。

二 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 素直にハクジョウする。
- 2 休日にデンラン会へ出かける。
- 3 電話がコシヨウ中で使えない。
- 4 服のボタンをハズす。
- 5 コマやかな気配りに感謝する。
- 6 友情をハグクんでいく。

